

# マイノリティとしてのろう文化

——聞こえないことをどう捉えるか——

はじめに

日本では、聞こえないことは障害や福祉のイメージにはなかって、日本語と別の言語に基づいた文化という認識にすぐ至らない。しかしアメリカでは、耳の聞こえないろう者(Deaf)を言語的少数者とみなす考え方が広まってきている。障害という病理学的な視点からデフを見るのではなく、音声言語とは違う言語を持つ文化グループとして見るのである。この際、文化とは芸術的に洗練されたものだけでなく、生活習慣、考え方、価値観、行動様式などを丸ごと指す。そこには大文字を使って自らを“Deaf”と表現し、デフであることを自分のアイデンティティとして積極的に主張するろう者たちがいる。

「聞こえないこと」(deafness)を文化と捉える考え方は、日本でも、ろう社会の内部ではかなり紹介されている。しかし、

澁谷智子

ろうの世界と馴染みのない聴者には、ほとんど知られていないのが実状だ。日本において、ろう者と聴者を隔てる溝はまだ深く、実際にろう者に出会うことのない聴者は、依然として、ステレオタイプ化されたイメージでろう者を捉えている。<sup>(1)</sup>

この論文では、ろう者は文化的マイノリティであるという立場に立ち、日本のろう文化と聴社会との関わりを論じようと思う。前半では、日本の聴覚障害者についての基礎的な知識と、アメリカのろう文化のあり方を紹介する。後半では、「聞こえない人」を描いた映画やドラマを分析しながら、日本の一般的な聴者が持つ「聞こえない人」のステレオタイプについて考え、さらに、聴者による作品とろう者が作った映画を比較して、「聞こえないこと」の捉え方の違いを見ていくつもりである。

第一章 聞こえないこととはどういうことか

聞こえない人を定義するとき、当然問われるのはその人の聴力である。普通に聞こえる人の聴力はおよそ一〇デシベルから三〇デシベルで、日本の厚生省は、両耳が七〇デシベル以上の人を聴覚障害者と認定している。七〇デシベルは「耳元近くで大声で話すときと聞こえる程度」で、現在三十六万人ほどの聴覚障害者がいると見られている<sup>(2)</sup>。

しかし、聞こえる程度を基準に見ていくと、聴者はしばしば「聞こえないこと」を「耳が遠い」のと同じ感覚でとらえてしまう。頭の中は自分と同じ日本語だと信じて疑わず、ただ聞くという感覚機能が損なわれただけだと思う。「聞こえないこと」が、言語、価値観、行動様式に違いをもたらすことを、聴者は見落としがちである。多くの聴覚障害者が文字による情報を利用できないと聞いて、たいていの聴者はびっくりする。文字は音声言語の表記であり、耳の聞こえない人にとっての日本語の習得は、聴者が外国語をマスターするより難しいことを忘れてるのである。

実際、聴覚障害者の間で重要視されるのは、聴力を表す数値よりも文化的背景の差である。日本では聴覚障害者は中途失聴者、難聴者、ろう者と大きく三つに分けられるが、それぞれのグループの間では、価値観もコミュニケーション手段も違う。

中途失聴者は、音声言語を身につけた後に聞こえなくなっ

た人を指す。中途失聴者は日本語を耳で聞いて知っているから、日本語の発音はきれいで、聴者の唇を読むのもうまい。頭の中でも日本語の言語体系がしっかりできあがっている。また中途失聴者は、聴覚障害者の中でも、聞こえないことを障害として最も意識している。かつて聞こえる世界にいたために、音を失った喪失感は強く、孤独に悩む人も多い。一般に、中途失聴者は、日本語と日本語に対応した手話を併用している。

難聴者は、補聴器を使って音がある程度識別できる人で、音声言語をコミュニケーションの中心にしている。あくまでも音声によって日本語の獲得をめざす教育を受けるが、中には完全に話せる言葉をも身につけられないまま、成人してしまう人もいるという。聞こえる人に行きつくことを理想として育てられるので、聴者への同化願望を強く持っている。ろう者は、生まれつき聞こえないか、音声言語を獲得する前に失聴し、コミュニケーションの中心を手話に置く人を指す。聴者というマジョリティの中で孤立しがちな中途失聴者や難聴者と違って、ろう者は仲間との確固たる連帯感を持っているのが特徴だ。ろう者の多くはろう学校で学んだ経験をもち、ろう社会と深く関わりながら生活している。ろう学校は、ろう者の言語と文化の伝達場であり、たいていの生徒は、ここで自分以外の聞こえない人に初めて出会い、ろう者

としての意識を持つようになる。手話やろう者の価値観を身につけさせるのは、学校の授業ではなく、寄宿生活やクラブ活動などでの生徒同士のつきあいである。聞こえなくても、聴者を対象にした普通校で学んだ人は、手話を知らず、感覚も聴者に近い。ろう文化を主張する革新的なろう者は、そのような人を聴力に関係なく難聴者と呼ぶ。ろう者は聞こえるという経験がほとんどないので、物理的な面での障害をそれほど意識していない。そのかわり、価値観や生活習慣における聴者との差異を、社会で理解されたいと願っている。

## 第二章 日本のろう文化論争

これらの三つのグループの間には軋轢あつれがある。端的に表しているのが、手話をめぐる論争だ。ろう者の間で伝統的に使われている手話と、中途失聴者や難聴者が使う手話は違う。前者は、日本語とは異なる文法体系を持った、独立した言語である。その始まりは、一八七八年の京都盲啞院設立に遡る。京都盲啞院は日本で最初のろう学校にあたり、その設立によってろう者集団が形成されたことから、この手話が生まれたと言われている。一方、後者は、日本語の文法に手話の単語を埋め込んだピジンのような言葉である。後者は日本語の単語を英文法の語順で並べるようなもので、完全な言語とはいえない。音声言語を話しながら手を動かすその言葉を、ろう文化を主

張する人々は、やや否定的な意味をこめてシムコム (Simultaneous Communication の略) と呼ぶ。そして、ろう文化の拠り所である言語の正統性をはっきりさせるためにも、ろう者の手話以外のものが手話という名称を使うことを批判する。これに対し、中途失聴者や難聴者は、日本の「手話」という言葉は「聴覚障害者のさまざまな手指での表現」を含むと反論し、それらを手話と認めないことは、中途失聴者や難聴者から言葉を奪う行為だと批判している<sup>(3)</sup>。

手話論争をさらに複雑にしているのは、シムコムの方が、ろう者の手話よりも世間に広まっているという事実である。日本語を話しながら手話単語を並べるシムコムは、日本語を習得している人には取っ付きやすく、手話を「学ぶ」人のほとんどは、このシムコムを学習する。しかし、本来二つの言語を同時に話そうとするのは無理な話で、話している時の思考は、結局どちらかに偏ることになる。自分の声が聞こえてしまふ聴者は、話していることを手話で表現できたものと錯覚し、手話が不完全になっていることにすら気がつかない。日本の手話通訳者のほとんどはこのシムコムの熟達者で、その大部分はろう者の手話を理解することも表現することもできないという。

日本におけるシムコム優勢の背景には、聴覚障害児を音声社会に合わせることを目的としてきた、ろう教育の歴史が関

わっている。口の形から話を読みとることを読話、息や筋肉の調節をたよりに声を出すことを発話というが、今世紀に入ってからろう教育は、この読話と発話を重視する口話主義をとってきた。特に六〇年代の日本では、純口話主義のもと、手話は厳しく禁じられ蔑まれた。口話教育のめざすモデルは聞こえる人であるため、聴覚障害者の意識の中でも、聴者に近い方が好ましいという価値観が作られたようである。聴者に近い感覚をどれだけ身につけているかを基準に、中途失聴者、難聴者、普通校で学ぶ聴覚障害者、ろう学校で学ぶろう者、ろうの親から生まれたろう者などの間に、優劣が意識された。手話は、口話についていけない者が、肩身の狭い思いをしながら使い続けたものだった。しかし、口話の限界が明らかになるにつれて、手話に対する見直しがなされてくる。口の形では、既に知っている言葉しか読み取れない。音の概念や日本語の基礎知識を持たずに、読話や文字で新しい知識を取り込むのは、至難の業であった。こうした事情から、手によるコミュニケーションが導入されるようになる。しかし、それらはいくまでも口話を補助のものであり、手話が授業で系統的に教えられることはなかった。しかも、生徒同士が使うろう者の手話は方言のようなものと見なされ、標準語にあたる正式な手話は、日本語に対応したシムコムであると認識された。シムコムは聞こえる人には習得しやすく、ろう者にして

も口話よりは理解できる。そのため、シムコムは聴者とうろ者をつなぐ言葉となったが、日本語に基づくシムコムが上手なものも手話を日本語で説明できるのも聴者であり、手話講習の場では、手話通訳者が中心となってシムコムを教えるという繰り返しが見られた。

聴者を頂点とする階層の底辺に自らを位置づけていたろう者にとって、八〇年代後半にアメリカで広まってきたろう文化の考え方は、画期的だった。ろう文化の発想は、ろう者の手話がれっきとした独立言語であることを証明した言語学者、ストーカーの研究に基づいている。それはアメリカ手話(A.S.L.: American Sign Language)だけでなく、日本手話についても当てはまる。ことが、言語学者、神田和幸氏によって示された。ろう文化の考え方は、聞こえないことを障害としてのみ捉えるのではなく、言語と文化の問題として肯定的に受けとめ、ろう者こそその主体となるべき存在である、と謳っている。日本でも九〇年代初頭からろう文化が唱えられるようになり、一九九五年『現代思想』三月号で発表された「ろう文化宣言」では、その主張がろう社会の外側に向けてアピールされた。

この「ろう文化宣言」は、文化の正統性を唱える立場上、いくらか急進的な性格を持ち、ろう文化をおびやかすものを大胆に攻撃した。そのため、ろう教育に携わる人や聴覚障害者

の家族など、聞こえない人を囲む聴者の反響も大きかったが、とりわけ聴覚障害者の内側では、アイデンティティをかけた激しい文化論争に発展した。この宣言で文化的に聴者と位置づけられた中途失聴者や難聴者は、その主張の排他性に猛反発し、社会における聴覚障害者へのサービス充実のためには、聞こえない者同士の団結が必要だと唱えた。ろう者側は、団結自体、一種の同化差別であると応酬し、これまでの体験から、一つになることがもたらす抑圧を指摘した。聴者との交渉はその文化を知っている方が有利なため、結局聴者に近い者が指導権を握り、彼らの要求を聴覚障害者全体の要求としてしまう点（テレビをとってみても、中途失聴者は字幕を、ろう者は手話通訳を求め、その要求は必ずしも同じでない）。そして中途失聴者とろう者が話す際には、ろう者が中途失聴者のシムコムに合わせざるを得ず、自分の意見を外国語で表現するような圧迫を感じるという点。政治的・目的のために手を組むことはあっても、根本的には異なる者であり、違う文化に属していることを認めるようにと、ろう文化推進派は主張した。

ろう者の中にも、ろう文化の思想に戸惑いを覚えたり、反発する人はいる。ろう文化を推進する人々も、アメリカのモデルがそのまま日本にあてはまらないことは、自覚しているようだ。しかし、アメリカの思想を紹介した「ろう文化宣言」

が、「聞こえないこと」に対して、今までとは違う見方を提示したことは確かで、それは聴覚障害者をめぐる福祉や教育、通訳の問題に、次第に反映されてきている。

### 第三章 アメリカのデフ事情

ろう文化という考え方を生み出したアメリカでは、社会のあり方も日本とは違う。さまざまなマイノリティが文化の独自性を主張するため、一般の人の意識も、言語や文化の多様性に対して開かれている。アメリカのデフ・コミュニティは、耳が聞こえないことによってではなく、ろう者の言語と文化を共有することによって成り立っている。ASL（アメリカ手話）を使い、ろう者としての自覚を持つことが、コミュニティを構成するDeafの定義である。

そもそもろう文化の発想は、公民権運動の盛り上がり、ASLが言語として社会に認められていく時期が重なって、生まれてきた。大文字のDeafは、黒人が自らをBlackと表現したことに、影響されている。Deafの大文字は、自分たちの文化に誇りを持って生きる意志を示すために、使われたものだった。社会から低く見られている属性を、自分のアイデンティティとして積極的に認める点で、Deafは少数民族に共通すると考えられている。アメリカの一部のろう学校では、バイリンガル・バイカルチュラル（Bilingual Bicultural: 二言語・二

文化）教育が実践され、ここでは手話と音声言語、ろう文化と聴文化が、対等に教えられている。

障害者へのサービスが充実していることも、アメリカ社会の特徴である。聴覚障害者に対しては、公的機関での文字電話（TTY）の設置や、デフが聴者と電話する際のリレー・サービス（デフの文字電話と聴者の電話の間にオペレーターが入り、デフのメッセージを音声に、聴者の言葉を文字にして伝えるシステム）などが実施されている。テレビでは、四大ネットワークの七〇%の番組に字幕がつく。日本のテレビの字幕化率は、最も進んでいるNHKで十五%、関東圏の民放の平均は三%にも満たない<sup>(6)</sup>。聴覚障害児の教育についても、個人のニーズにあった教育法や学校を、幅広い選択肢から選べるようになっていく。ろう学校でない普通校でも、手話通訳や特殊学級のような制度が整備されている。アメリカのろう者の大学進学率は、日本に比べて高く、大学は、デフ学生が一人でもいれば、手話通訳やノートテイカーを提供する義務を持つ。またデフのための大学も存在し、それらの大学の授業はASL（アメリカ手話）で行われる。高学歴を持つデフは、卒業後も、大学教授や医者など、社会的に地位の高い職業に就いている。

アメリカのデフは九〇%近くがデフと結婚し、その多くは生まれてくる子もデフであることを期待するという。子供が

デフならば、同じ文化を共有できるからである。公民権運動以降、アメリカのマイノリティは政治的な力を持つようになるが、デフ・コミュニティも、自らの権利拡張をめざして、積極的に社会に働きかけてきた。デフのための大学、ギャロウデット大学の学長選出をめぐる紛争は、デフ・パワーを示した事件として名高い。一九八八年、理事会が選出した学長候補がASLやろう文化をよく知らない聴者であったため、デフ団体が抗議して、博士号を持つデフを学長にした事件である。また、ハリウッド映画『Voices』は、ろう者の役を聴者の女優が演じたという理由で、デフのボイコットを受けた。

デフを文化と捉えるデフ・コミュニティは、「ろうの治療」を進める医学研究に対しても反発している。今日の医学では、人工内耳を埋め込むことによって、耳を聞こえるようにする手術が既に存在する。デフ・コミュニティは、このような「ろうの治療」をジェノサイド（文化的虐殺）と呼び、Deaf<sup>1</sup>を根絶やしにする行為だと非難している。

#### 第四章 映画やドラマに描かれる「聞こえない人」

実際にろう者に出会う機会を持たないほとんどの聴者は、メディアによって「聞こえない人」のイメージを作っている。中でも大きな影響を及ぼすのが、映画とテレビの大衆向けフィクションが見せる「聞こえない人」像である。それらは社会

の多数派の意識を反映しているため、見る者にわかりやすく、世間にも広まりやすい。このようなステレオタイプの生成と普及には、大衆文化の作り手と受け手の相互作用が常に働いている。

聴者による「聞こえない人」の描き方には、いくつかの共通要素が見られる。まず物語の形式として、ほとんどがラブ・ストーリーか「苦勞&感動もの」になっている。ラブ・ストーリーで描かれるのは、ろう者と聴者の恋愛が多い。聞こえない人物は一樣に美男女であり、その社会の多数派にとって好ましい資質を身につけている。たとえば、日本の作品に登場するろうの女性は、やさしく控えめだが、真の強さを秘めていて、心根はどこまでも純である。一九九五年に日本で放映されたドラマ『星の金貨』も、日本映画『息子』もこの系統を踏んでいる。

苦勞ものに登場する聞こえない人物は、たいてい子供か親で、家庭や学校などが話の舞台となる。聞こえないことから来る困難を通して、家族や友人、先生や生徒の心が結びつくというのがおおよその主題だ。けなげでひたむきで、哀れ且つ立派というのが、聞こえない人物に重ねられるイメージである。「障害は不便だけど不幸ではない」ことが前面に押し出され、「障害を乗り越えて」得られる幸せが賛美される。日本映画『名もなく貧しく美しく』、『遙かなる甲子園』などは、こ

の範疇に入れられる。

次に手話の扱い方だが、最近では、手話が聴者の懂れを込めて描かれることが増えている。わかる人にだけわかるという限定性は、内輪の優越として映り、「かっこいい」と見なされるようだ。日本でドラマの人気を受けて空前の手話ブームが起ったのも、聴者から見た手話の「かっこよさ」ばかりが強調された結果である。しかし、作品において、手話は言葉というより、聞こえない人を表す視覚的なマークとして使われている。手話が画面で切れているかなどは、作り手はあまり意識していない。

手話が単なるろう者の視覚的表象となつて、断片的に切り刻まれてしまう分、言葉は、字幕や聴者の声に過度に依存することになる。手話のわかる聞こえる人物は、手話を声に出して反復したり、前の内容を受けた返事をするこゝで、聞こえない人物の言葉を代弁する。発言する時には、音声言語と手話を同時に話すので、観客は、手話は音声言語に対応しているという印象を持ちやすい。現実には、異なる二言語を同時に発することは不可能なのだが、このような描写は、手話が独立した言語であるという認識の普及を、妨げている。厳密に言えば、これらはピジンの要素の強いシムコムか、別々に覚えた二つの言語表現を練習によって同時に出来るようにした、役者の努力の産物にすぎない。

三番目の特徴は、沈黙を神秘的に描く傾向である。音のない世界は、水中のイメージなどに喩えられ、聞こえない人は、その世界の住人として、自動的に静けさと結びつけられる。聞こえない分、ろう者は無意識に音を立てがちで、時には聴者以上に騒がしいという現実、ほとんど省みられない。

このような映画やドラマを、日本のろう者がどう受けとめているのかという点は重要である。私は、ここには二つの矛盾した感情が働いていると思う。一方にあるのは、これらの作品によって、社会のろう者への関心が高まったことを、歓迎する気持ちである。実際に、ドラマの流行は、職場で聴者と共有できる話題を提供し、テレビの字幕放送サービスを向上させた。ろう者が生活しやすい環境を作っていくためには、社会の多数派にろう者について知ってもらうことが必要であり、映画やドラマの社会的影響力は利用したいとの思いがある。しかし一方で、それらが広めるステレオタイプへの抵抗も強い。実際とはかけ離れたろう者像が描かれ、実生活でのレッテルをつけて見られることへの不快感である。「ろう者の役はろう者の俳優に」という主張は、自分の文化を正しく認識してほしいというろう者の気持ちの現れといえる。

## 第五章 ろう者が作る映画

耳の聞こえない監督が作るろう映画は、出演者もスタッフ

もほとんどがろう者である。基本的に演技は手話で行われ、その空間の使い方や顔の表情には、手話を日常的に使うろう者の感覚が現れてくる。ステレオタイプに対する反動から、ろう映画では感動的なストーリーは避け、誇張のきいたコメディや淡々としたドラマを扱うことが多い。夫婦喧嘩や別れ話などのネガティブな題材も、当然のように使われる。また、ろう映画でしばしば滑稽に描かれるろう者の姿は、風刺となつて、ブラックのあるユーモアを提供する。

ろう映画の映像は、視覚的にもろさへのこだわりが強い。映像のリズムを作り出すための動きの強調や、短いショットの組み合わせもよく見られ、唇のクローズアップのような、音を読ませる映像も登場する。手話は常に言葉として機能し、画面からはみだして意味が通じなくなることは決してない。音や音楽を挿入する時には、音そのものの存在を感じさせるような入れ方をする。一般の映画での音が、映像に溶け込んで無意識に聞かれることが多いのとは対照的である。

日本の代表的なろう映画としては、東京在住のロバート・ホスキン監督による『ちぎりあい』や、那須英彰監督による『刻は流れゆくまに』が挙げられる。前者は耳の聞こえない夫婦の喧嘩を描いたコメディで、聴者のために、日本語と英語の字幕と音楽がつく。後者は、女優となっていくろう者の女性を主人公にしたドラマで、ろう演劇の影響が強く見られる。原



則として音や字幕はつかず、聴者の観客が来るような上映会では、声優が手話によるセリフを実演する。

日本のろう文化の表象としては、ろう演劇や手話狂言の方が、歴史も古く完成度も高い。しかし舞台での公演は、見に来る人の数と種類に限界があり、場所や回数に束縛されずに上映できるろう映画に、ろう文化啓蒙の期待がかけられている。

### 終わりに

ふつうの聴者が初めてろう者に接すれば、たいていは違和感を覚える。しかし障害者を差別してはいけないとの思いから、多くの人はあえて違いを意識しないようにする。——日本の一般的な聴者の行動をこのように評した意見があるが、なかなか鋭い洞察だと思う。

日本人にとって、多数派と違っていることに対する抵抗はまだまだ強い。しかしアメリカなどでは、多数派との違いは個性として積極的に受け入れられている。国民性の問題もあるので、一概に善し悪しを言うつもりはないが、日本人ももう少し、真つ正面から違いを見るゆとりを、持ってみてもいい気はする。大切なのは、その違いを相手にも自分にも気詰まりなものにしないで、自然に受けとめることではないだろうか。

見て見ぬ振りをする代わりに違いに関心を持ってみれば、自ずと自分の姿も見えてくる。たとえば、異文化としてろう文化を捉えた時、今まであたりまえすぎて見えていなかった聴文化というものにも気づく。ろう映画から感じるものは、ろう者の豊かな視覚世界であると同時に、「聞く」ということでもある。

今でこそ普及しているが、もともと「和食」という言葉だって、西洋という異文化にふれて出てきたものだった。江戸時代には、「食事」といえば、「和食」を意味したのであって、殊更にそれが日本的なものだとは誰も思わなかった。極端な例かもしれないが、世界で多様化が進み、外に対して自分を説明することが求められてきている今、違うものに照らし合わせて自己を言葉で把握することの意義は、ますます大きくなってきているように思う。

しかし、気をつけたいのは、アイデンティティを考えていくときにも、あまりにも単一的な捉え方をしないことである。個人を作っているのは、幾重にも重なったアイデンティティなのだ。日本文化とろう文化と女性文化に同時に属することだってある。ステレオタイプについても、そのすべてが悪いとは思わないが、その陰に隠れてしまっている部分にも目を向けていくことが必要である。聴者の作ったフィクションとろう映画の比較は、そのことをよく示していると思う。

マイノリティの視点は、常に社会の多数派の固定観念を打ち砕く、貴重な可能性を秘めている。そのような視点を、多数派の基準で「逸脱」と捉えたり敬遠したりせず、きちんと尊重できる余裕のある社会にしていきたいものである。

## 註

- (1) この論文では、ろうを文化と捉える視点を尊重し、聞こえる人を「健聴者」ではなく、「聴者」と表現する。
- (2) 岩淵紀雄『喜・怒・哀・楽そして夢——聴覚障害者からのメッセージⅡ』（オリジン社、一九九二年）十三ページ。
- (3) 長谷川洋『ろう文化宣言』、『ろう文化を語る』を読んでの疑問「『現代思想』二十四巻五号（青土社、一九九六年四月）一〇四ページ。
- (4) 栃木県立ろう学校は、同時法的手話、つまりシムコムの指導を行なったが、日本のろう学校の中では例外的な存在だった。今でも日本のろう教育は基本的に口話主義をとっている。
- (5) 木村晴美・市田泰弘『ろう文化宣言』『現代思想』二十三巻三号（青土社、一九九五年三月）三五四～三六二ページ。
- (6) 一九九八年一月の時点で、聴力障害者情報文化センター字幕制作共同機構が出している数字である。
- (7) 日本映画『遙かなる甲子園』（大澤豊監督、大映、一九九〇